ユダヤ人の見たハインリヒ・ベル
——ライヒ=ラニツキの『九時半の玉突き』論

渡　辺　将　尚
（ドイツ文学）

1

1972年にノーベル賞を受賞したハインリヒ・ベル(1917-1985)は，第二次世界大戦後作家として出発し，自らの従軍体験をもとに，戦争を背景とした作品をつぎつぎと世に送り出した。その際，彼が一貫して焦点を当て続けたのは，時代状況や戦争そのものよりもむしろ，そういったものに翻弄される弱い人間たちのほうであった。

1959年に発表された『九時半の玉突き』も，基本的にそのような流れに沿ったものであると言える。建築家である主人公ローベルト・フェーメルは，かつてナチス時代に抵抗を試み，一時期国外に逃亡せざるを得なかった，いわば弱者・被害者である。この作品は，登場人物たちの１人称の語りによる回想を中心に構成されているが，彼らはみな弱者の側にいる人間であり，彼らの口から代わる代わる語られるのは，戦争へ加担した者たちへの批判と被害者への同情である。

我々が「被害者」という言葉を聞いてすぐに思い浮かべるのは，おそらくユダヤ人であろう。しかし，ここでの「被害者」はユダヤ人ではない。すべてドイツ人である。この作品における被害者が一義的にドイツ人を指していることは，ローベルトが語る最初の回想ですぐに明らかにされる。まるでユダヤ人など始めから念頭にないと言っているかのようにさえ思われる。1935年のラウンダーズの試合のあと，何度となくくりかえされる友人シュレラへの暴力が弾圧であることを察していたローベルトはつぎのように尋ねる。

「『なぜ』と私（＝ローベルト）は尋ねた。『なぜなんだ？おまえユダヤ人だったのか？』
『いや，ちがう。』
『じゃあ何なんだ？』
『子羊さ。俺たちは水牛の聖餐を決して食べないことを誓ったんだ。』とシュレラは言った。」[1)]

「子羊」，「水牛」とは，それぞれ，弾圧を受けた者，弾圧を加えた者のことである。したが

って，「水牛の聖餐を食べる」とはナチスの片棒を担ぐことを意味する。シュレラは，ユダヤ人だからではなく，考えを同じくする仲間たちとともにナチスに抵抗することを誓っていたがゆえに弾圧を受けていたのである。

このような作品は，戦時中ナチスに抵抗した組織を描いたいくつかのドキュメンタリー的作品と同列に置いて，その枠内で一定の評価を下すこともできる。しかし，ここで1つの疑問がわいてくる——当然真っ先に被害者として扱われるべきユダヤ人から見て，ドイツの弱者に限定して暖かい目を注ぐこのような作品はどのように映るのだろうか。

1963年に出版されたマルセル・ライヒ=ラニツキ(1920-)の評論「モラリスト・ベル」は，この問題を考える上で非常に興味深い。ユダヤ人としてポーランドに生まれ，戦後ドイツで屈指の文学批評家となった彼のこの評論は，ベルの初期作品の中から主要なものを順に取り上げ，論評を加えていったものである。[2]本論では，ライヒ=ラニツキがベルの作品をどのように評価したのかを，『九時半の玉突き』を中心に見ていく。そこで明らかになる両者の見解の違いは，作品理解という枠を超えて，歴史に対するドイツ人とユダヤ人の見解の違いを顕著に表しているように思われる。

2

ここではまず，「モラリスト・ベル」の議論に沿って，ライヒ=ラニツキがベルの初期作品全体をどのように評価しているかを概観しよう。ライヒ=ラニツキによれば，『九時半の玉突き』も，他の初期作品と同一線上にあり，同じ特徴をもちあわせているからである。

彼がベル文学のなかで肯定的に評価するのは，その視点が過去にではなく，いつも現在に向いているという点である。

「ベルは早々と「克服されない過去」の詩人として烙印を押された。・・・（しかし）彼の作品は，いつも『ここ』と『いま』に根ざしているのだ。」[3]

ベルが過去に沈潜している作家という認識は正しくない。彼はいつも現在を起点として過去を見つめる作家である。この特徴は『九時半の玉突き』に極めて明確に表れている。小説の舞台は，1958年9月6日に限定され，登場人物たちはそこから過去に目を向ける，いわばフラッシュバックの手法が用いられているからである。[4]したがって，ベルは「同時代人に働きかけ，人々を教育し，生の変化に貢献」[5]することを理想とする作家だと言うことができるのである。

ところが，同時に否定的な面も指摘されている。それは，ベルがあまりにも単純化したテ

ーゼを掲げているという点にある。

「人間は善であるが，世界は悪である——たしかにここまであからさまに表現されたことはないが，これは若いベルの作品の中に常に存在するテーゼである。」[6)]

ライヒ=ラニツキは，この二分法のテーゼがベルの作品の中でさまざまな問題を生じさせていると見る。第一の問題は，戦争が「訳の分からない残酷な現象，あるいは恐ろしい病気として」[7)]捉えられる点。第二の問題は，その二分法が人間にも適用され，あまりにも単純に「人間を犠牲者と処刑者に二分」[8)]することになってしまう点である。

このような問題点を，いくつかの作品を参照しつつ指摘した上で，ライヒ=ラニツキは『九時半の玉突き』の批評に入っていく。彼は，これらの問題がやはり『九時半の玉突き』にも当てはまると見る。まず，第一の問題は明らかである。主人公ローベルトおよびその家族たちは，すべて時代に翻弄される人間たちである。そのような主人公たちから描かれる戦争は，当然のことながら人間の力では抗うことのできないものとなる。ローベルトは，戦争を憎みながらも，軍に配属されればそこで見事に順応し，昇進していく。軍で昇進するということは，一見すると戦争およびナチズムに加担しているように思われるが，この作品ではそれが抵抗しながらも運命に飲み込まれていく過程として描かれているのである。第二の問題に相当するのは，人間を「子羊」と「水牛」に分ける二項対立の図式である。ライヒ=ラニツキは，この二項対立が「現実をゆがめ，粗野な単純化につながらざるを得なかった」[9)]と指摘する。ところが，その一方で，そのように単純化し，「子羊」たちに温かい目を注ぐという，まさにこのことによって，「ベルは多くの読者の共感を集めた」[10)]のだという。

3

ライヒ=ラニツキが指摘する2つの問題点のうち，第一の点は正しい。しかし，第二の点に関しては誤解がある。なぜなら，この作品には，彼の言う単純な二項対立に還元できない要素が存在するからである。[11)]では，その要素とは何なのか。

前述のように，この作品の舞台は戦後10年以上が経過した1958年9月6日であり，この1日を起点にして，登場人物たちは自らの過去を語る。そのうちもっとも古いのは，ローベルトの父ハインリヒの物語である。彼は，1907年の同じ日，ある修道院を建てた。厳しい競争を勝ち抜いた末に，修道院の設計者に選ばれた当時の彼には，このあとも未来が自分の思い描いたとおりに実現するかのように思えた。

「80歳の家長である私が親族の上に君臨しているのが見えた。」[12)]

彼が80歳になるのは，この小説の舞台である1958年である。作品中直接書かれてはいないが，さまざまな発言の内容からハインリヒは1878年生まれであると推測できるからである。しかし，1958年の彼は，家長として君臨してはいない。2度にわたる戦争が彼から家族を奪い，その妄想を完全に破壊してしまったのである。彼の子供たちは，ローベルト以外，ローベルトの妻になったエーディットもふくめてみな死んでしまう。しかも，第二次大戦で戦死した末の息子オットーは，戦争に熱狂する者たちによって感化されていた。ハインリヒにとって，思い描いたとおり自分が大家族の家長となれなかったばかりか，家族を守れなかったことが生涯の負い目となっている。

ただひとり生き残った息子ローベルトの回想は，1935年のラウンダーズの試合から始まる。この日から彼は，当時すでに抵抗運動に参加していた友人シュレラと親密な関係になり，抵抗運動家たちが集っていたカフェにも出入りするようになる。それによって彼自身も危険な目に会うことになる。ドイツ国内にとどまることが危険になった彼は，一時アムステルダムに逃亡するが，すぐに帰国し，その後は軍において爆破のスペシャリストとして華々しい貢献をすることになる。

軍における彼の任務は，味方が進軍しやすいように，障害になる建物を爆破し道を空けることにあった。しかし，彼はこの任務を別の目的を果たすためのものとして理解していた。つまり，抵抗運動に参加し命を落とした仲間たちのための復讐である。そのなかで，ついに彼の父が建てた修道院も，爆破すべきかどうかの議論の俎上にのせられる。ローベルトは，反対者の意見を押し切って，この修道院を爆破する。終戦を迎える直前の出来事であった。[13)]

彼が修道院爆破を強行したのは，つぎの理由による。

「彼は，文化史的に価値あるものでもなく，いたわりも与えられなかった人たちのために，ほこりと瓦礫でできた記念碑を建てたかった。」[14)]

この引用文によれば，ローベルトは修道院を爆破することで，犠牲となった人々を記憶にとどめておこうとしたことが分かる。しかし，「水牛」と「子羊」の二項対立で読んでいる限り，この考え方には疑問が残る――なぜローベルトは父親の建てた修道院を爆破しなければならなかったのだろうか。ローベルトも父親のハインリヒも同じ「子羊」側の人間である。もし，爆破されたものが「水牛」に関わる建物であれば，それは「水牛」に対する復讐行為として簡単に理解できるのである。つまり，このような二項対立からは，作品のもっとも重要な部分が理解できない。

ローベルトが，父親の建てた修道院を爆破することということは，彼の糾弾の対象が「水牛」だけに向いているのではない，言い換えれば，彼にとって「水牛」のみが罪ある者とされているのではないことを示している。彼の糾弾の目は，「子羊」である父ハインリヒにも向けられている。ハインリヒは，修道院を建設した当時，将来家長として華々しく君臨することを思い描いていたが，結局はそれを果たせず，一族を守ることができなかった。ハインリヒにとって，修道院とは華々しい未来の象徴であったから，息子のローベルトがその修道院を破壊するということは，責務を果たせなかった父への糾弾となる。この作品は「水牛」と「子羊」の単純な二項対立ではなく，「子羊」と呼ばれる人間たちの内部においても葛藤が存在する，より複雑な構造をもっていたのである。奇妙なことに，ライヒ=ラニツキはこの点についてまったく言及していない。

4

なぜ，ライヒ=ラニツキは，被害者内部での葛藤に——気づかないとは言わないまでも——重要性を見出していないのだろうか。これは，彼にとって，作品そのものに対してではなく，ベルの戦争観について理解できない部分があることに起因していると思われる。ここからは，あるインタビューにおいて，ベルが戦時中および戦後について語った内容を見ていこう。

ベルは1939年に召集されてから終戦までの間に，何度か前線に送られているが，意外にも彼は「前線」というものについてつぎのように考えていた。

「私は，前線での戦争も経験してみたいと思っていました。熱狂していたわけでも，能力があったわけでも，適していたわけでもありませんが，まだ若く，好奇心が旺盛だったのです。」[15)]

この好奇心は，学校時代，教師や周囲の大人たちから聞かされた話に強く影響されたものであった。

「いわゆる前線での経験は，教師たちの経験でした。」[16)]

「それは教師たちの世代の経験であり，ほとんどすべての戦争文学の対象でした。」[17)]

しかし，前線において極限状態を経験した彼は，二度とそこに出ることを望まなくなる。

終戦後，彼は一時期アメリカ軍の捕虜になるが，その後家族のもとに帰ってくる。その当時についての彼の回想からは，彼が戦後社会について感じた問題点が顕著に見て取れる。

「私たちは疲弊していました。私たちとは帰還者世代全体のことです。これを知るのはたいへん重要なことです。なぜなら，後の連邦共和国の政治体制は，年老いた人たちによって作られたからです。」[18)]

ここで「帰還者世代全体」と言われているが，あとで言い直されているように，実際この言葉が指しているのは18歳から35歳の間である。その世代は疲弊していたというが，その原因は当時の政治を支配していた「年老いた人たち」にある。彼らが政治の実権を握ることが問題なのは，以下のような理由による。

「・・・（彼らは）個人としてではなく社会的グループとして1933年の出来事に対して盲目だった人たちでした。これらの人たちは――たいへんりっぱな人たちで，ナチでもなく，それどころか消極的であれ積極的であれ抵抗した人も多くいました――連合国から当然のごとく，また必然的にドイツの戦後政治に取り立てられたのです。」[19)]

ベル自身，彼らがナチスに加担していないことを認めている。しかし，彼らがナチ支配下において何もせず，傍観していたことが非難されている。しかも，そのような人たちが，戦後多少の罪に問われただけで，ふたたび政治の中心に取り立てられ，戦後ドイツの規範作りにまで関与するのである。「連邦共和国の法律は，この年配の紳士たち，市民的でリベラルでたいへんりっぱな人間たちによって作られました。」[20)]

ベルが戦争および戦後について語る文脈の中で注目しなければならないのは，ドイツ国内あるいはドイツ軍内部の事情しか登場しない点である。自分たちがどのような動きをとったのかは詳細に報告されるが，その相手に関する描写がまったくないのである。[21)]その報告の仕方は，あたかも敵が存在しないまま戦争が遂行されたかのようである。したがって，被害者と加害者も，必然的にドイツ人の中から決定されることになる。さらに問題なのは，ここで被害者と加害者を分ける尺度となっているのが，それぞれが属する世代であるという点である。ベル自身が属する世代は自動的に被害者，教師あるいは親の世代は加害者となる。戦争をめぐる問題は，教師または親の世代がベルたちの世代に与えた教育の問題，および年老いた者たちがなかなか支配権を譲らないという社会的な問題に置き換えられる。つまり，ドイツの戦中・戦後史は，世代から世代への抑圧=反抗の歴史に書き換えられているのである。[22)]

ここから，ナチズムによって遂行された第二次世界大戦は，その被害の大きさおよび異常性にもかかわらず，歴史上類を見ない異常事態ではなく，昔からくり返し生じてきたものの

一つだという考え方も派生する。戦争によって生じた問題がすべて世代の問題に還元されてしまうならば，それは世界中のどこでも，またいつの時代で起こるごくありふれた問題となってしまうのである。同じインタビューの中で，ベルは明らかにこの視点に立った発言をしている。

「・・・この年齢層（18歳から35歳まで）に対しては多くの不信感がありました。それは，ただナチス党員だったかもしれないというだけでなく，ニヒリズム，無関心，市民的様式に対する軽蔑などが，きわめて疑わしさを誘うものだったからでした。」[23)]

終戦直後の若者の状況について語ったものである。ベルは終戦当時27歳だから，ちょうど彼のいう「この年齢層」に属することになる。彼によれば，「この年齢層」は不信感をもって見られていた。その原因はいくつか挙げられているが，この時代に特有の事情は，いちばん初めに挙げられた「ナチス党員だったかもしれない」という点だけである。そのほかは，当時のドイツでなくても，いわばどこでも起こりうる若者層と年配者層との間の葛藤である。このことが，つぎの段落ではよりはっきりした形で述べられている。

「これはおそらく，どの国でも，どの戦争のあとでも，政治体制にかかわらず起こる問題なのです。」[24)]

ベルが提起する第二次大戦および戦後ドイツの問題は，当時のドイツに特有のものではないのである。『九時半の玉突き』において取り上げられている問題も，まさに同様である。なぜなら，そこでも扱われているのは，「子羊」内部での世代間の葛藤だからである。ライヒ=ラニツキが，「子羊」内部にまで目を向けられなかったのは，彼にとってこの考え方がなじみの薄いものであり，受け入れ不可能なものだったからであった。

ライヒ=ラニツキがベルに期待するのは，もっと別な点にある。ふたたび「モラリスト・ベル」を参照しよう。彼は，ベルの初期作品（1951年の『どこにいたのだ，アダム？』から1963年の『道化の意見』まで）をひととおり概観したあと，ベル文学全般に関して，つぎのような結論に達している。

「そのような原始的な主人公の視点では，複雑なドイツの現在にはもはや貢献することができない。ベルは，周囲の状況にアレルギー的に反応する主人公というモデルにとどまり，それゆえに，ある種の時代錯誤的な観察方法から抜け出すことができなかった。」[25)]

彼によれば，社会がかかえる問題は，時代とともに刻一刻と変化している。いわば，一回限りの出来事である。第二次世界大戦も歴史上類を見ない異常な出来事である。戦争がいつも同じひとつの問題に還元できるということはありえない。しかし，ベルはその変化についていくことができていない。いつまでも同じ問題をとりあつかう，「原始的」で，「時代錯誤的な」ベル文学は，その時々の時代に合ったテーマを取り上げるべきだったのである。

5

『九時半の玉突き』には，2つの対立の図式が存在していた。ひとつは，加害者「水牛」と被害者「子羊」の対立，もうひとつは，「子羊」内部での世代間の対立である。しかし，ライヒ=ラニツキは前者の対立のみに着目し，後者には目を向けることができなかった。ライヒ=ラニツキが，「水牛」と「子羊」の二項対立を単純化だとして批判するのは，この二項対立よって，責任があるはずの「子羊」側の人間が弱者として扱われ，彼らの罪がうやむやにされていると読んだからである。

一方，ベルの関心はそこにはない。彼にとっては，一見「子羊」——被害者——を装う人間にも罪があることを暴き出すことが重要であった。「水牛」というカテゴリーは，そこに至るために設けられた単なる最初のステップであり，それを批判することが真の目的ではなかったのである。

ハインリヒ・ベルとマルセル・ライヒ=ラニツキ両者の間には，この作品の意図に関して決定的な認識の違いがあったわけだが，結局その違いは単なる作品解釈上の違いではなく，それを超えて戦争をどう捉えるか，また犯罪を犯したドイツ人をどう捉えるかという戦後ドイツの問題に関する見解の違いであったと言える。

（注）

1）Heinrich Böll : Billard um halbzehn. Köln und Berlin (Kiepenheuer &Witsch). 1959. S.51.（　）内は引用者による補足。特にことわりのないかぎり，後の注釈でも同じ。

2）この時点で，両者の間にはすでに面識があった。彼らが初めて会ったのは，1956年，ベルがポーランド作家連盟の招きでワルシャワを訪れたときであった。このとき，ライヒ=ラニツキは，作家連盟側を代表してベルを出迎える役を負っていた。(Marcel Reich-Ranicki : Mein Leben. München(Saur) 2002. S.436.)

3）Marcel Reich-Ranicki : Böll, der Moralist. In : Deutsche Literatur in West und Ost. München(Piper). 1963. S.125. なお，引用文中の2つの『　』は原文にはない。原文では，それぞれ Hier, Jetzt と語頭が大文字表記になっている。

4）語り手は作品中何度も1958年9月6日という日付を口にする。たとえば，つぎのような文においてである。

「取替え式の額縁の中には1958年9月6日の午後の青い空，いまやふたたび隙間のなくなった一連の屋根のシルエット・・・」(Böll : Billard um halbzehn. S.86.) 「取替え式の額縁」とは明らかに窓のことである。戦争によって家々が破壊されたり修復されたり，めまぐるしく風景が変わっていくことからこのような表現が使われているのであろう。この文によって読者は，小説の舞台が戦時中ではなく戦後であることを改めて認識させられる。回想から現実に引き戻されるのである。

5) Reich-Ranicki : Böll, der Moralist. S.123.

6) ibid. S.129.

7) ibid.

8) ibid.

9) ibid. S.137.

10) ibid. S.130.

11) この作品が単純な二項対立で読めないことは，『九時半の玉突き』において，「加害者」の人間的側面に焦点が当てられる部分があることからも明らかである。「殺人者はいつも殺人者であるわけではなかった。昼も夜もいつもというわけではなかった。鉄道員に終業時間があるように，殺人者にも終業時間があったのだ。」(Böll : Billard um halbzehn. S.150.) これは語り手による文であるが，文中の「殺人者」とは，「水牛」に分類されるネットリンガーとベン・ヴァッケスである。彼らはローベルトや彼の仲間たちに激しい弾圧を加えるが，その反面，ローベルトを釈放したり，シュレラを指名手配者リストから外したりと人間的な行動をとることがあったのである。

12) ibid. S.79.

13) この修道院を再建しようとするのが，ローベルトの息子ヨーゼフである。ヨーゼフは最終的には，修道院再建工事から手を引くことになるが，この作品は，祖父が建てた修道院を息子が爆破し，孫が再建するというひとつの核になる物語の周辺に，登場人物たちのさまざまな回想が重なり合うという構造になっている。

14) ibid. S.172.

15) Böll : Eine deutsche Erinnerung. Interview mit René Wintzen. München (Deutscher Taschenbuch Verlag) 1981. S.127.

16) ibid. S.127.

17) ibid.

18) ibid. S.138.

19) ibid.

20) ibid. S.140.

21) インタビュー中，何度も「赤軍」や「アメリカ軍」といった敵を表す言葉が登場するが，それ以上ふみこんだ詳細な報告がなされることはない。

22) クリストフ・メッケル(1935-)も，自伝『隠し絵』の中で同様の批判を展開している。彼は，戦前ドイツを支配していた世代が，敗戦を経験しても一向に反省せず，支配権を維持ししようとする様を糾弾している。新たなドイツの創造に寄与しようと考える目覚めた者と，旧態依然のドイツに固執しようとするいまだ目覚めぬ者との葛藤が描かれているとも言える。ただし，メッケルが展開したこの図式はあまりにも単純なものであり，さまざまな問題をはらんでいる。この点については，拙論：「裏返しのサクセスストーリー——メ

ッケルの『隠し絵』に見る戦後ドイツ」〔「山形大学紀要（人文科学）第15巻第3号」2004，91-102頁〕を参照。

23）Böll : Eine deutsche Erinnerung. S.140.

24）ibid.

25）Reich-Ranicki : Böll, der Moralist. S.141.

Der Deutsche Heinrich Böll und der Jude Marcel Reich-Ranicki —zum Roman „Billard um halbzehn“

Masanao WATANABE

Heinrich Böll schrieb viele Werke, deren Hintergrund der Zweite Weltkrieg war. Dabei schilderte er eher leidende Personen als die Zeit oder den Krieg selbst.

„Billard um halbzehn“(1959) hat auch dieselbe Tendenz. Der Held, der Archtekt Robert Fähmel, ist der Leidende : Er leistete den Nazis Widerstand, musste ins Ausland fliehen. Dieses Werk besteht hauptsächlich aus den Monologen der Hauptpersonen, die an den Nazis Kritik übten und mit den Leidenden tiefes Mitleid hatten.

Was uns zuerst einfällt, wenn wir in Bezug auf den Zweiten Weltkrieg das Wort „die Leidenden“ hören, sind wahrscheinlich Juden. Aber in diesem Werk tritt kein Jude auf. Die Leidenden sind alle Deutsche. Es ist, als ob Böll von vornherein nichts von Juden im Kopf gehabt hätte.

Wie bewertet ein Jude dieses Werk, wo ein Deutscher nur mit den deutschen Leidenden Mitleid fühlt? Um diese Frage zu beantworten, wird in der vorliegenden Arbeit die Literaturkritik von Marcel Reich-Ranicki „Böll, der Moralist“(1963) analysiert, die mehrere frühe Werke Bölls einschließlich „Billard um halbzehn“ chronologisch behandelt. Reich-Ranicki liest ganz anders als die Absicht Bölls. Dieser Unterschied, der in dieser Arbeit deutlich gemacht wird, bezeichnet nicht einfach denselben der Interpretation, sondern der Denkart über die deutsche Kriegsschuld.